同定に苦慮したCampylobacter fetus subsp. fetus による慢性髄膜炎の一例

○戸田　宏文,松岡　優子,椿本　祐子,喜多　いずみ,田甫　康弘,佐藤　かおり
飯森　真幸,秋山　利行(近畿大学医学部附属病院 中央臨床検査部)

【はじめに】Campylobacter fetusは、本来家畜に流産等を起こす病原菌であるが、ヒトに対しても病原性を示すことが知られている。今回我々は、非典型的な性状のために同定に苦慮したC. fetus subsp. fetusによる慢性髄膜炎を経験したので報告する。

【症例】43歳　男性【主訴】頭痛、発熱【現病歴】平成15年12月中旬、前医にて著明な髄膜刺激症状、髄液検査所見および一般細菌・抗酸菌培養検査陰性のためウイルス性髄膜炎と診断され、2週間入院。退院後3ヶ月にわたって髄液所見の改善がなく、軽度の頭痛が持続したため当院神経内科紹介となった。【臨床経過】平成16年3月31日入院時の髄液検査では無菌性髄膜炎の所見であったが髄膜刺激症状は認めなかった。発症時より内服中の解熱鎮痛消炎剤を中止後頭痛が消失し、薬剤誘発性の無菌性髄膜炎と考えられた。入院時採取した髄液から4月6日にG(－)桿菌を検出したが菌同定には至らなかったため、主治医が汚染菌と判断し4月11日退院となった。しかし再度頭痛が出現し、4月24日再入院となった。再入院後はCTX　PIPCが投与されたが3回にわたって菌が分離され、MEPMに変更後菌は陰性化した。【細菌学的検査】入院時の髄液のグラム染色では、単核細胞優位で菌は陰性であった。培養5日目にGAM半流動培地の上層部に細長く一部がらせん状に湾曲したG(－)桿菌の発育を認めた。分離菌はオキシダーゼ(＋)、カタラーゼ(＋)でありCampylobacter spp.を疑って同定を行った。生化学的性状のみではC. fetusと思われたが、42℃に発育を認め、一般的なC. fetusの性状と乖離していた。最終的に16SrDNA塩基配列およびPCR法による亜種同定によりC. fetus subsp. fetusと同定した。【まとめ】本症例で分離した菌株は、典型的な性状を示さなかったため迅速に同定することが出来なかった。またC. fetus髄膜炎の多くは単核細胞優位であり無菌性髄膜炎との鑑別のためにも迅速に分離・同定する必要がある。

謝辞：16Sr DNA塩基配列解析およびPCR法による亜種同定を実施して頂いた国立感染症研究所　細菌第一部　和田昭仁先生に深謝致します。

連絡先：0723-66-0221(内線2193)